

随 想

思 い 出

吉 井 周 雄*

My Reminiscence

Chikao YOSHII

定年退官ということは以前からわかっていることでしたが、その心構えはなかなかできませんでした。長年住みついていた教授室の書籍の山の中で毎日講義をしたり、研究室のものと討論したりする環境に埋もれていると退官という心の準備などできるものではありません。そして3月末になつて現実に直面し、送別会や何やらと追われて4月1日にご苦労様でしたということになりました。

たまたま4月2日より再び私立大学で教鞭を取る仕事がついていたのですが、大きな変化を迎えました。北大では助教授・助手・技官や大学院学生に囲まれて安泰な生活を送っていましたが、学科目制の私立大学へ来ると予算規模や制度も異なり、一人ぼつちで何でもやらねばならないことになります。今まで長老の身であつたのが新任者の戸迷いを感じる毎日になりました。

思い出しますことは、やはり大学を卒業してすぐ、特殊鋼生産の一員として大同製鋼へ入社したころです。化学を専攻した私が、鉄鋼生産の場で電気炉製鋼に熱力学的考え方の導入や海綿鉄の製造などに従事しました。また米国の爆撃機 B 29 の発動機の点火栓が純鉄で作られていたとか、ソ連の戦車に Si-Mn-Cr 鋼が構造用鋼として使われていて、いずれの国でも Ni の不足を来していたものと推察されました。日本でも Ni-Cr 鋼の代用鋼の研究が盛んであつて、私も Cr-Mo 鋼や純鉄の研究にたずさわることができました。しかし、戦時中ははつきりした一つの目的に向つて皆が結集していたので、苦しいというよりも一生懸命働いていたので研究成果の良し悪しは別として、実験や試作に充実した毎日を過ごせたことは私の鉄冶金への第一歩として思い出深いものでした。

昭和 24 年に会社から大学へ移りました。今は美しく整備されている工学部の前庭も細分されて職員が芋とか玉蜀黍などを耕作していました。私にもその配分があるとのことでしたが、とても自信がなく上手な人に権利をゆずりました。その時は買い出しに明け暮れる時代は

過ぎており、学生も講義に全員出席していました。昭和 23 年に冶金工学科は火災で実験設備の多くを焼失しましたので、学生が映画会やダンス・パーティーを企画して、実験器具を寄付してくれたのは大変嬉しいことでした。25 年の秋に北大工学部で鉄鋼協会の秋期大会が開かれました。札幌は戦災を受けない都市の一つでした。

戦後、生産現場にいて研究から遠去かつていたので、実行委員として接待関係を受け持たせていただきました。当時協会の事務局長は三松さんという海軍少将の方でしたが、非常に腰の低い方だつたことが印象に残っています。宿舎も十分になく、ホテルは進駐軍が入っていました。参会者はお米を持参してみえられ、駅前に天幕を張つて宿舎のご案内をしたものでした。その時、札幌の地図をはがきの裏に印刷して宿舎の場所の印を付けてお知らせしたのですが、札幌はほとんどの地域がはがきに入つてしまう程の街でした。また懇親会を大学の中央講堂を使つて行いましたが、飲み物のビールの調達が一番大変でした。たまたま札幌のビール工場がもう製造を行つていたので大変お世話になりました。これが私が鉄鋼協会の大会をお世話させていただいた第 1 回で、それから 5 回北大で大会を行うことになりましたが、時代の進展とともにその盛大さはめざましいものがありました。その時にもう 70 才にお近かつた俵国一先生が吉川晴十先生と来札されました。大会の朝に両先生をお迎えに旅館へ参りましたところ、俵先生が靴をはかれるのを吉川先生（海軍中將で東大名誉教授）が紐を結んであげておられる情景を見まして、師弟関係の美しさをほのぼのと感じました。私の恩師の柴田善一先生が終戦直前に逝去されて、恩師に恵れなかつたので、なおさら感銘が深かつたのかも知れません。また、和田亀吉博士（八幡製鉄部長をやられ、現在黒崎窯業株式会社相談役）からお聞きしたのですが、名誉教授室におられる俵先生をお訪ねすると何か有意義な知識やお話をされてありがたかつたとのことで、新しいお話がない時は先生が誠に済まなそうにお土産がなくて悪いねと申されたとのことで

* 北海道大学名誉教授 北海道工業大学教授 工博

す。私もその万分の一でも真似をしたいものだと思っておりますが、現役ならいざ知らず、退官すると仲々むずかしいことです。しかし、その専門についてはできるだけそうありたいと願っています。

昭和 26 年より新制大学が北大にも設けられ、切換え当時は複雑な辞令をもらい、旧制大学を兼務している形でした。旧制の学位の授与の関係上 37 年 3 月まで継続されました。新制大学はいわゆる Ph. D の学位の考え方で、スクーリングを重要視する博士課程を導入しましたが、一方旧制の学位論文の審査も続けていましたので、その影響で新制の課程博士の論文のレベルについても要求が高かつたわけです。そのために当初は修士・博士課程を通じて学部卒業後 5 年では学位を取ることは全く困難でした。しかし、次第に新制大学の理念も浸透して論文博士と課程博士の扱い方も変つてきたようです。いずれの過程でも取得すれば博士の称号を持つので、長年の業績、人によつてはライフ・ワークの業績をまとめて論文を出した人も大学院規則による最短 3 年の課程で取り得る課程博士も同じ称号であることは社会も、また取得した人々も何となく矛盾を感じているようです。課程博士と論文博士の両者がある以上、何か呼称を変えればよかつたと思いますが、発足当時ならできたかも知れませんが、今となつてはなかなかむずかしい問題です。博士課程を出た人は広い視野で見ることのできるように学問を身につけているはずなので、論文博士の人とは異なつた考え方で社会も気軽に採用して修士と同様に多くの職場でその知識を活用していただきたいと思つています。教育制度として立派なものも宝の持ちぐされにならないように利用していただきたいと念願し、折に触れて、お願いして来ましたが、認めていただくことはむずかしく、かえつて近年は敬遠されてきているようです。

また昭和 30 年代には所得倍増、生産増強の波に乗つて学科増、学生増募が計られ、各会社は人員の拡充に新卒者の奪い合いの現象となり、品質管理方式、計算機の導入などで新しい分野で新しい感覚の技術者の必要性が要求されました。そしてなるべく質の低下を来さないでこれに答える卒業生を出すために多くの大学の行つた学科増設に対して、北大の金属の教室では学科の延長線上にある研究施設を拡充して、教育研究の充実を計るべく考えました。しかし研究施設拡充への予算要求は仲々入れられず、初期の目標の 3 分の 1 しか充足されていないのが現状で残念です。しかし将来に向つて北大の学科と研究施設が一体となつての発展は一つの学科のパターンとして期待されるものと思つています。

各大学とも学生数が増加し、戦前の種々の施設を転用した学生寮は老朽化も甚しくなり、建て直しを要求されておりました。戦前は高等学校に寮があつて、それらは自治寮で寮主事のような職員がいましたが、運営はほとんど学生にまかされていて、学校側と管理問題でもうま

く協調されていきました。それも長年の間に学校との何回かの交渉によつて相互の信頼の上に立つて均衡が保たれていきました。学生は長い伝統の中に青春を謳歌し、人生哲学を論じ人間形成に努力して来ました。ご承知のように終戦後、旧制高等学校の制度は廃止されて新制大学が発足し、大学に学寮が置かれた。そして育英制度の発達と教育の機会均等からどんどん大学を目指して子弟が入学して来た。学寮は一種の厚生施設的な意味を持つようになり、極端な場合はアパート化し、大学の教育理念の一貫としての学寮は薄らいで管理運営も学生の自治の名のもとに著しく乱れた例もありました。そのために大学としては大学における教育の場としての学寮へ引戻すべく、少くとも入寮者の詮衡と確認について大学が関与すべきであるとの見解で、老朽化した寮を建て替える際に、寮規則を改正すべく努めた。しかし寮生は既得権の剝奪であるとして全国的学寮斗争が展開されました。昭和 40 年より私は北大の学生部委員（各大学でその名称は異なるが、学生の厚生補導に当り、各学部より代表として委員が出る）として工学部より選出されてこの問題に直面させられた。私は北大予科の時代に恵庭寮に入つていて、寮生活の何ものかも知つていたし、若い時代の寮生活は大変良い経験であると感じていた。しかるに学寮の雰囲気は私の時代と全く変つていた。学生部の意向を説明すべく寮生と夜を徹して話合つたことは数度に及んだのですが、妥協点が見出されるような空気ではなく、寮生側は頑迷にさえ見えた。また一般学生や職員にも周知させるため広報活動としてパンフレットの配布をしたり、討論をして学内意見の吸い上げも計つたが、寮問題は全国的学生運動の一貫であつて、なかなか進捗しなかつた。そのような場に出てきて議論すると学生は教室で見る学生とは違つた学生気質を示していることを知ることができました。また各学部の教官とともにこのような仕事をやつていると、委員の間に連帯感が湧いて来るし、各学部の事情などもよくわかつて来て、大学というものを理解するのに役立ちました。学生部委員も 2 年間で解放されてほつとしたところへ、北大にも大学紛争の波が押し寄せて来ました。表面上は大学および管理当局への不信感をかざし、その中で大学への不満や自由という言葉を使つて大学の改革を要求していました。たまたま新制大学が発足して 10 数年であり、学科増や拡充で教員の充足に頭を悩め、大学教育にも不満の点があつたかもしれません。また産学協同に対する反対などで、大学は無力で教官は無能呼ばわりさえされました。この時期に大学の評議員に選出されて衝に当ることになりました。一般の先生方の研究をできるだけ阻害されないように願つて努力していましたが、工学部も数回の封鎖に会いました。幸いにも警察導入を行うこともなく、研究設備の損傷もなく経過できました。大学では学生は常に利用者であり、通過者でありますので、数年の間にはその

考え方や動き方も変化し、大学の態度も確固たるものができてきて、大学内の問題での紛争はほとんど見られなくなり、大学構内は当時とは隔世の感があります。

昭和40年の前半は学生運動も華やかで、時限立法まで飛び出す騒ぎで、全国大学金属関係教室協議会の集会でも当時は各大学の紛争に対する情報交換の会のようで、いずれの大学でも頭を悩ましていました。同協議会が最近取りましたアンケートで、このような紛争経験を踏んだ私としては当時卒業した学生諸君の解答の中で、大学をどのように評価しているか強い関心を持っていました。しかしそれらの学生諸君は社会の中へ出てからは大学出の技術者としての誇りと責任を感じ、社会からの期待に答えるべく努力しているということを知りました。大学という場は懐疑的に物を見ながら、そこから新しい解決を引出して発展に結びつけて行くという体質を持っているのですが、戦前と教育制度も変ったことでもあり、学生との対応はきめ細かく行う必要があると思われれます。そして学寮問題、大学紛争の当時は一般に学生が意外に活気を持っていたことは学生のペースで先生方と議論ができる場があつたためかと思えます。

大学紛争も終息に向かい、再び研究面に帰つた時に、ますます大形化された高炉があり、また解体調査により

興味ある多くの事実が発表され、オイルショックなど大きな変化に遭遇し、新しい研究課題が目の前に展がっていました。しかし月日の経つのは速いもので、それらを追いかけているうちに十分な心の準備のないままに定年を迎えた次第です。定年後どうしたらよいかということには気がかりでした。このまま今までの知識なり、生活のペースを崩してしまつて新しい道に生きて行くことには自信がありません。一応専門書を読んだり、それを理解してまとめたりする力は多少あると思つていますので、専門雑誌の拡充されている会社の図書室などを利用して頂いて専門の情報をまとめたりすることは自分の頭脳と身体老化を防げると思いました。しかし、会社の図書室を利用することは当然、種々の制約もあることでしょうが、会社の邪魔にならないようにして一種の奉仕の精神で社会にお役に立てる場が欲しいと思いました。このような考えを実行しないで今の境遇にいられることは仕合せでした。

この頃になつてやつと過去を振り返つて見て多くの先輩や学会、学振などの研究環境に恵まれて、一応鉄冶金学の研究と学生の育成に何らかの貢献ができたのであろうかと自問し、また、自分にそう言い聞かせています。